もう一度会えたなら

もう一度会えたならーside Hyunckel

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=17449412

ダイの大冒険, ヒュンケル, アバン, モルグ, ザボエラ, クロコダイン, 師弟邂逅祭, 誇りの一番弟子

師弟オンリーイベント「誇りの一番弟子」お題企画「師弟邂逅祭」に合わせて出させていただきました。
こちらはヒュンケルside。
テーマは「涙」「顔向けができない」

いろいろな時期を切り取ったら、タグがえらいことになってしまいました・・・。なんだ、この組み合わせ・・・。
ついでに、新アニメ74話を見る前に書いたものだということを懺悔します・・・。

もう一度会えたなら—side Hyunckel

　その姿を忘れたことなど、ただの１日もなかった。

　ゆっくりと、だが確かな足取りでこちらに向かってくるその人の姿を目の当たりにし、ヒュンケルは自分の見ているものが信じられなかった。
　夢だと思った。
　あまりにも焦がれた己の心が生み出した幻なのだと。
　そう思った。
　彼の視界は、はっきりと師の姿を映していた。
　それにもかかわらず、彼は、自分の見ているものが何なのか、そこにいるのが誰なのか、理解できなかった。
　信じられなかったのだ。
「先生っ！！」
　アバンに抱きかかえられたポップが、アバンにすがって泣く声が響いた。
　その声に、ヒュンケルは夢から現実に引き戻されたような心地がした。
　ダイもマァムも、アバンに駆け寄る。
　おとうと弟子たちの姿を目にし、ヒュンケルはようやく理解が追い付いた。自分の見ているものを信じることができた。
　アバンが、帰ってきた。
　生きていてくれた。
　だが、ヒュンケルの足は、凍り付いたようにその場から動かなかった。おとうと弟子たちのように、師に駆け寄ることも、ましてや、すがって泣くこともできなかった。
　アバンは、ポップを抱きしめ、ダイの頭を撫で、マァムに微笑んだ。
　そして、ゆっくりと顔をあげると、ヒュンケルにその穏やかな眼差しを向けた。
　ヒュンケルは、呆然としたままアバンを見つめていた。

そのヒュンケルの視界で、アバンが顔を上げ、まっすぐにヒュンケルを見つめた。アバンは、昔と変わらず、穏やかな笑みを浮かべていた。
—先生だ・・・。間違いない。
　１０年以上の時を経ての再会であった。幾分、年を取ったものの、その微笑みも、眼差しも変わってはいなかった。ヒュンケルが師を見間違えるはずもなかった。
　目の前の男は、アバンその人に他ならなかった。
　頭と心で、それを理解すると、ヒュンケルの中に、嵐のようにこの１０数年の感情が押し寄せてきた。
　父の仇だと信じ、憎み続けた歳月。
　それでも温かく接してもらったことへの感謝と戸惑い。
　彼を殺すことだけを目標に生きてきた日々。
　それが突如として奪われた日のこと。
　そして、ダイたちと行動をする中で聞いた、アバンとの思い出。
　アバンの遺した彼の書の文字を追いながら、もう亡いと思っていた師の面影を脳裏に蘇らせ、ヒュンケルは思った。
　もっと、貴方に教わりたいことがあった。
　話したいことも、聞いてほしかったこともたくさんあったのだ。
　そうして、心の中でアバンに語り掛けることしかできなかった。
　その師が、あれほど会いたいと願った彼が、いま目の前にいる。
　だが、その事実をはっきりと認識できたにもかかわらず、ヒュンケルは、やはりその場から動けなかった。
　自分を見つめるアバンの眼差しと、視線が交錯していた。
　アバンの瞳が、青年となったヒュンケルの姿を捕らえると、アバンは、まなじりを下げ、口の端をあげて穏やかに微笑んだ。
　ヒュンケルは夢から醒めたようにはっとした。
　そして、こみ上げてくる感情を押し殺し、あふれそうになった涙をこらえ、ヒュンケルはきつく唇を噛んだ。目を閉じる。
　そのまま、彼は師に背を向けた。
　そうすることしかできなかった。
　だが、視界から外しても、蒼天の元、マントをはためかせ、毅然と立っていたアバンの姿は脳裏に焼き付いていた。

―・・・先生。
　ヒュンケルは、心の中でつぶやき、目にしたばかりのアバンの姿をかみしめた。
　きつく、唇を噛む。
　だが、そうしていても、１０数年間、凍り付かせたままだったその思いは、涙となって溢れ出た。
　まるで雪解けのときを迎えたかのように。

　不死騎団長ヒュンケルの玉座には、常に執事のモルグが付き添っていた。
　そのモルグが、ヒュンケルの前で、いつものように恭しく頭を下げた。
　だが、この日、彼が語る言葉は、残念ながらヒュンケルの歓迎するところではなかった。
　モルグは頭を下げながら、主に報告をした。
「鬼岩城からの伝令がございます。悪魔の目玉をお繋ぎいたしますが、よろしいでしょうか。」
「構わん。」
「では。」
　短い会話でヒュンケルの承諾を取り付けると、モルグは、悪魔の目玉を呼び込んだ。
　この「悪魔の目玉」は、モンスターではあるのだが、同種族の間で、互いが見ている映像を共有することができるという特性を持っていた。
　そのため、その性質を利用して、魔王軍では、悪魔の目玉を使った伝令システムが構築されていた。
　ヒュンケルが足を組んだまま、玉座に腰を下ろしていると、悪魔の目玉の画像が揺らぎ、醜悪な老人の顔を映し出した。
　ヒュンケルは眉をひそめた。
―・・・ザボエラか。
　ヒュンケルが毛嫌いしている妖魔師団長が、画面の向こうで、その姿を現していた。
「ご機嫌いかがかな、不死騎団長殿。相変わらず男前じゃのう。」

「余計なおべっかはいらん。用件はなんだ。」
「生意気な口を叩くのう・・・。
　まあよい。本日はめでたき日じゃ。」
　ヒュンケルは、ぴくりと眉をひそめた。ザボエラがめでたい、ということなどたいていがろくでもないものだ。
　ザボエラは得意げに話し始めた。
「聞け。
　魔軍司令ハドラー様が凱旋なさった。
　すばらしい戦果じゃ。」
　嫌な予感がますます強くなる。だが不機嫌そうに警戒心を強めるヒュンケルにかまいもせず、ザボエラはそのまま報告をつづけた。
「魔軍司令ハドラー様におかれては、勇者アバンの抹殺に成功した、とのこと。
　これで我ら魔王軍の最大の障害がなくなったわ。
　大魔王バーン様も、ことのほかお喜びじゃ。」
「・・・何だと？」
　ヒュンケルは上ずった声でつぶやいた。
　ザボエラの言葉が理解できなかった。
　アバンの抹殺？
　成功した？
　その平易な言葉の意味するところは一つしかなかった。だが、ヒュンケルの頭が、そして心が、その言葉を理解することを拒否していた。
　ザボエラはなおも報告を続けていたが、ヒュンケルの耳には入っていなかった。
　ただぱくぱくと、その口が動いている映像だけがヒュンケルの瞳に映り、だがその画さえも、彼の頭の中で像を結んではいなかった。
　嫌な汗が、ヒュンケルの背を伝い流れた。
　胸がむかむかし、吐き気さえもこみあげてくる。
—・・・死んだのか？
　あの、アバンが・・・だと・・・？
　ようやくヒュンケルの頭脳が「死」という言葉を選び取った。

だが、それと同時に、ヒュンケルの体が大きく傾いだ。
「ヒュンケル様！！」
　モルグが悲鳴のような声をあげて駆け寄った。
　ヒュンケルは、その身を大きく傾け、玉座から転げ落ちそうになっていた。口元を手で抑えており、呼吸が荒く、大きい。
　モルグは、ヒュンケルの身を支え、悪魔の目玉に振り返った。
「ザボエラ様。ヒュンケル様は、ご気分がお悪いご様子でございます。
　概要、把握いたしました。
　本日は、ここで通信を切らせていただきますゆえ、ご容赦を。」
　すぐ目の前にいるはずのモルグの声が、いやに遠くに聞こえた。
　ザボエラにとりなすモルグの事務的な声を、ヒュンケルは、まるで人ごとのように聞いていた。

　モルグの手を借り、どうにか自室に帰り着いたヒュンケルであったが、それさえも、どうやって部屋に戻ってきたのか、はっきりとした記憶が残っていなかった。
　意識はあったにもかかわらず、頭の中は、ザボエラが伝えてきたハドラーの凱旋報告のことばかりで、ヒュンケルは、他のことを考える余裕もなくしていた。
　自室で長椅子に身を預けながらも、ヒュンケルの脳裏には、不吉なザボエラの言葉が、忘れがたく張り付いていた。
　ハドラーの凱旋。
　抹殺。
　障害がなくなった、とのこと。
　どの言葉も、さす内容は一つだった。
―・・・死んだのか、アバンが。
　ヒュンケルは、無意識のうちに、胸元に右手を伸ばした。服に隠れて見えないその下に、涙型の輝石が息づいていた。
　ヒュンケルがアバンから渡された、たった一つの餞別だった。
　アバンは、ヒュンケルを１人前だと評し、金の鎖に通したこの輝石をヒュンケルに渡した。
　その石を握りしめると、いまもなお、温かさが感じられた。

だが、いまは、その温もりさえも腹立たしかった。
　ヒュンケルは、きつく唇を噛んだ。
　ぎりりと、食いしばった歯が、唇に食い込み、血をにじませる。
　ヒュンケルは、襟元から、卒業の証を取り出した。
　そして、ヒュンケルは、自分の首が傷つくのも構わず、力任せにその金の鎖を引きちぎった。
「・・・ふざけるなぁっ！！！！」
　ヒュンケルは、怒りに任せて、輝石を通した金の鎖を投げ捨てた。涙の石は、壁にぶつかり、かしゃんと、繊細な金属音を立てて床に落ちた。
「死んだ、だと！？
　そんなことが許されるとでも思っているのか！！」
　誰にともなく、ヒュンケルは叫んだ。
　一度火がついた激情は、とどまるところを知らなかった。
　ヒュンケルは、目の前のテーブルに置かれた水差しを、勢いよくなぎ倒した。繊細な硝子細工で作られた水差しは、その中身とともに、床に落ち、砕け散った。
　テーブルを叩く音が響く。
　マホガニーの重厚なテーブルが悲鳴を上げた。
　ヒュンケルは両の拳を、何度もテーブルに叩きつけていた。
　悔し気に唇を噛み、己の手が痛むのも気に留めず、何度もテーブルを叩き、そして、それでは気が済まなくなったのか、立ち上がると、目の前の重いテーブルを蹴り飛ばした。
　テーブルは大きな音を立てて倒れ、脚や、天板の角が、破片となって飛び散った。
　ヒュンケルは、傍らに立てかけてあった魔剣を引き抜くと、一刀のもと、テーブルを叩き斬った。
　ヒュンケルは肩で息をしながら、なおも怒りに任せ、本棚に剣を握る拳を叩きつけた。ばらばらと、本が床に落ちた。
　ヒュンケルの脳裏にあったのは、ただひとつのことだった。
―・・・アバン、何故、死んだ・・・！
　お前を殺すのは、俺だったはずだ・・・！
　俺でなければならなかったはずなんだ！

ヒュンケルは、アバンを殺すことだけを目標に、その腕を磨いてきた。
　父を殺したアバンを、ヒュンケルは、赦しはしなかった。
　だから、アバンには思い知らせなければならなかったのだ。
　ヒュンケルがいかにアバンを恨んでいるのかを。
　アバンが奪ったものがどれほど大きなもので、かけがえのないものだったのかを。
　実力でアバンを凌駕し、ひれ伏せさせ、そして、アバンの行ったことにどれほどヒュンケルが傷つき苦しんだのか、それをわからせたうえで、その命で償わせるはずだったのだ。
　それなのに。
　アバンの死により、そのすべてが失われた。
—・・・何故、俺の恨みを受け止めもせず・・・この世から消えたのだ・・・。
　お前に言ってやりたいことは、山ほどあったのに・・・！
　向ける先のなくなった激情が怒りとなってほとばしり、ヒュンケルはただ、物言わぬ調度たちに向かってそれを吐き出すほかなかった。
　ヒュンケルに拳を打ち付けられ、剣を振り下ろされ、ガラスの割れる、木の砕ける、布の裂ける音が響いた。
　それは、決して流すことのできないヒュンケルの涙の代わりのように、悲痛に響き渡った。

　翌朝、地底魔城の主の部屋で、モルグは、目を疑う光景を目の当たりにした。
　部屋の中の調度という調度は破壊され、その中で、ヒュンケルは半ば呆然と立ち尽くしていた。
　まるで戦場の廃墟の中にたたずむ、傷付いた戦士のような後ろ姿だった。

　テランでの戦いを終えた後、しっかりと休息をとるようにと大魔導士に釘を刺されたヒュンケルは、パプニカ城の客室に押し込められた。

寝るのが仕事だと言わんばかりに、その挙動が注意され、鍛錬などしようものならすぐさま指導が入る状況とあっては、ヒュンケルとしては大人しく部屋にとどまっているほかはなかった。
だが、このときばかりは、ヒュンケルにとっても、休養を申し付けられたのは好機だった。
マトリフが、瓦礫と化したカール王都から発掘してきた「アバンの書」。
これに最も興味を示したのが、アバンの一番弟子たるヒュンケルだった。
おそらくこれは、ヒュンケルと別れた後にアバンが執筆したものなのだろう。ヒュンケルがアバンと旅をしていたころには、このような書があるというのは、アバン本人からも聞いたことがなかった。
ヒュンケルは、アバン流槍殺法を覚えたいからとの口実の下、師の遺したその形見のような書物を熟読していた。
「熱心だな。」
同室のクロコダインが、ヒュンケルに声をかけた。
クロコダインは、無駄なことは言わない。揶揄ではなく、心からそう思っていることや、他意がないことは、付き合いの長いヒュンケルにはすぐに分かった。
だが、この師の書を没頭して読んでいることを知られるのは、ヒュンケルとしては、気恥ずかしかった。
「・・・しっかり読み込まないと頭に入らない。自力で覚えなければならないのだからな・・・。」
言い訳のようにそう言うと、ヒュンケルは、不意に自分の言葉に強い寂寥感を感じた。
アバンはもういないのだ。
アバン流槍殺法を覚えたいと思っても、アバンの指導を直接受けることはできない。
唯一の手掛かりはこの「アバンの書」であり、これを読み込んで自分で覚えていくほかないのだ。
ヒュンケルは、ふと、剣の章に戻って、そこを読み返した。
大地斬。

海波斬。
空裂斬。
そして、アバンストラッシュ。
剣の技が順に記載されていた。
ヒュンケルは、空裂斬の項目に目を止めた。
ヒュンケルがアバンに師事していた幼かったころ、空裂斬は覚えることができなかった。その前提となる闘気技も、ヒュンケルは身に着けることを拒否していた。
いまなら、闘気技を学びたいと思う。
グランドクルスは自力で編み出したが、その調整の仕方や効果的な使い方をアバンなら教えてくれそうだった。
そう、いまなら、学べることはたくさんあるのだ。
ヒュンケルは、ぽつりとつぶやいた。
「・・・アバンの元にいた頃は、俺はまだ、ほんの子どもだったからな・・・。
アバンはもっと様々なことを俺に教えようとしていたのだろうが・・・。」
ヒュンケルは、いったん言葉を区切った。そして、唇を強く噛むと、大きくため息を吐くように、言葉を吐き出した。
「・・・いまなら、もっと様々なことを教わることができたのだがな・・・。」
体が成長した分だけ、様々な技に挑戦することができる。
理解力が増した分だけ、様々な知識を習得し、戦略を学ぶこともできる。
そして何より、いまなら、アバンに反発せずに、素直に彼の言葉を聞ける、はずなのだ。
しかし、もう、その機会は来ない。
永遠に。
何気なくこぼした己の言葉に、ヒュンケルは、残酷な現実を突き付けられた。
それと同時に、強い後悔が襲ってきた。
アバンとともにあったあの頃、何故、彼の言葉を素直に聞けなかったのだろう。

何故、彼の指導をそのまま受けられなかったのだろう。
何故・・・憎み続けてしまったのだろう。
恨みの源は、すべて誤解であったのに。
そんなヒュンケルの心情を察してか、クロコダインはつぶやいた。
「アバン殿は、この書をお前に読んでほしかったのかもしれんな。」
ヒュンケルは、少し驚いた表情で、獣王を見返した。
「俺はアバン殿のことは知らん。
だが、非常に多才な方だったと聞いている。
そのような方が、自分の得た知識や経験を書物として残すのはよくあることなのだろうが・・・。」
そう前置きし、彼は言葉を続けた。
「今、こうしてお前がその書を読んでいる姿を見ると、思う。
お前がアバン殿の元を離れたときは、まだ幼かったのだろう？
アバン殿は、お前が幼かったゆえに教えなかったことがたくさんあったはずだ。
だから、いつかお前が成長したときに、アバン殿が教えたかったことが伝わるように、この書を残そうと思ったのかもしれんな。」
クロコダインの言葉は、ヒュンケルの中に、温かく、じわりと広がった。本当にそうだったら、どれほど嬉しく思うだろうか。
だが、一瞬沸き上がった期待を、ヒュンケルは無理やりねじ伏せた。
そんなことはあるはずない。
アバンは、常に広い視野で物事を考えていた。だからこの書も、後世に自分の経験や知識、技術が伝わるように残したはずなのだ。
ヒュンケルは、寂しげに言葉を零した。
「・・・俺は不肖の弟子だ。アバンがそこまで俺を気にしていたとは思えない。」
クロコダインは納得しかねるような、割り切れない色をその面に浮かべた。しかし、ヒュンケルの複雑な感情を感じ取ってか、あえて反論はしなかった。
「亡き者の想いは想像するほかはないがな・・・。」

友人想いのリザードマンは、ただそれだけをつぶやいた。
ヒュンケルは、再びアバンの書に視線を落とした。この書は、戦いの技術や見識を記載した専門書でありながら、その中に、随想のように書かれた箇所が所々あるのに、彼は気付いていた。
章ごとの合間に、軽い読み物のように書かれているその文章は、アバンの訪れた各地の村や街ごとの独特な習慣、風俗等が書かれていた。
その中には、ヒュンケルにも覚えのある街の祭りのことも記載されていた。
もしかしたらアバンは、ヒュンケルと旅をしていたあの頃から、この書を書き始めていたのかもしれないと思った。そういえば、ときどき、何か書きものをしている姿を目にしたことがあった。
あの頃の思い出が、もしかしたら、ほんの少しこの書の中に残されているのかもしれない。そう思うと、ヒュンケルは、師の生きた道の中に、自分の片鱗を見いだせたような気がした。
それだけで、十分だと思えた。

もし、再びアバンに会うことができるのなら、とヒュンケルは起きもしない奇跡を夢想した。
一度でいい。
謝りたい。
そして、感謝を伝えたい。
だが、その願いはかなうことはないのだろう。
ヒュンケルはただ、師の遺した書の表紙を撫でることしかできなかった。
幼かったあの日、取ることのできなかった、あの人の手の代わりに。

起きないと思った奇跡がそこにはあった。
もう二度と会えないと思った人の姿があった。
伝えたい言葉はたくさんあったはずだった。
空想の中で、何度も、思い出の中の師に言葉をかけていたはずだった。

しかし、いざ、その姿を目の当たりにしたいま、ヒュンケルの胸に去来するのは、申し訳なさばかりだった。
　言葉は何も上らず、その顔を見ることさえも、できなかった。